
思い出に代わるまで

八公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出に代わるまで

【Nコード】

N0600A

【作者名】

八公

【あらすじ】

『愛してる』 たった一言、この言葉を言えなかった。伝えたい相手は、もうこの世にはいない。彼女のいる過去と彼女のいない未来とを交差する彼の思い。『君が思い出に代わるまで』

第1章『悲しい過去』

伝えたい気持ちがある。
伝えたい。

伝えなかった

君に、僕の気持ちを伝えなかった。

たった一言、

たった一言だけなのに、

僕は言えなかった。

行き場をなくした気持ちは心に深く、本当に深く突き刺さっている。
伝えたい。

あの言葉を…

たった一言、

本当にたった一言…

君に。

伝えなかった…

第一章『悲しき過去』

窓から射す光が眩しい。暗い幸希の部屋に明るい日差しが差し込む。
徐にベッドから起き上がる、鏡の前に座り込む。

鏡に映ったその顔は、目は少し吊り目。

眉は細く、鼻は細く小奇麗である。髪の毛は

青い。寝癖が激しくついていた。

「糞…」

声は低くかった。

制服に着替え、服についた埃を取る。背は176cmだ。

自分の部屋を出て、洗面台に向かう。寝癖を直し、歯を磨き、顔を洗う。

台所に行くと、母親が朝飯をテーブルに乗せている所だった。

「今日の帰りは何時？」

母が幸希に話し掛ける。返事はしない。

椅子に座る。テーブルの上のパンを手にとり、口に運ぶ。普通の食パンだ。

「ジャムとか漬けないの？」

一枚を手を持ち席を立った。

「もう行くの？」

幸希は返事せず、鞆を片方の手に持ち、家をでた。

母の顔はどこか寂しげだった。

静かな道。夏だというのに蝉の声すら聞こえない。人はいるが、幸

希の耳に話声は聞

こえなかった。

目線は足元のアスファルトを一点に見つめていた。何か味気ない。何かが足りない。そんな感じがした。

学校は自宅から北側にある。

しかし、幸希の足は真逆を向いていた。真逆には、山、

神社、そして墓地がある。足は墓地に向かっていた。自分の意志で。

墓地の空気はそこだけ別世界のように冷たい。

まるで、今の僕の気持ちを表している

かのように…墓地の中をトボトボと歩く。足取りが重い。空気も重い。

ある墓の前で足が自然に止まった。

【高橋家墓石】

墓には大きくそう彫られていた。

昨日自分で取り替えた花が添えられていた。墓の前

にしゃがむと幸希は墓石を優しく、まるで触ると壊れてしまう物のようにゆっくりと

触れた。

「鈴佳…」

その名前を呼んだだけで、自然と涙が零れ、雫が頬を伝わり、地に落ちた。

「ごめん、鈴佳、本当にごめん…」

声にならない叫び。

伝えられなかった言葉。

僕の気持ち。

アイツの気持ち。

あの日の俺。

あの日のアイツ。

あの日の事が脳裏に蘇る。そう、あの日…一週間前のあの日…

「幸希。明日、海に行こうよ」

夏休み。蝉の声が耳につく。2人で歩くアスファルトの道は、暑か

ったが鈴佳と居れ

ば、大した事はない。

「海？」

隣の彼女が小走りで前に出て後ろを振り向く。

振り向いたその子は、目が大きく、小

顔。髪はショートヘヤー。背丈は160cmくらいだ。

「カップルの夏は海に決まってんじゃない」

「そうですか。じゃあ行く」

「本当？じゃ、明日桜木駅のベンチに集合ね！」

「おう」

明日の約束をした僕たちは、その後、各自の家に戻った。

自分の部屋でベッドに横になり、天井を見上げていた。誰もが羨む、可愛い彼女。明

るくいつも元気な彼女。

鈴佳のことが何よりも大切だった。愛していた。でも、鈴佳に『その言葉』を面と向かって言ったことはなかった。

（明日こそ、明日こそ言おう）

そう、心に決め、体を休める事にした。

【来ることのない明日がある】

その時は、そんな事になるとは心の片隅にも思っていなかった。

夜が明け、幸喜は目を覚ました。

夏の日差しが窓から差し込む。時計を見ると、朝の

九時。待ち合わせは十時。そろそろ起きないとやばい時間帯だ。体をベッドから起

し、服を着替え、髪を整えた。鞆に荷物を入れた。

時計をチラッと見ると、九時三十分を回っていた。

自宅から駅までは三十分、ギリギリだ。

家のドアを勢いよく開け、外に出た。

駅への道のりを少し早足で行く。時間がないのもあるが、なにより鈴佳に早く会いたかった。

その時、幸希の横を一台の救急車が猛スピードで走り去っていった。サイレン音は救急車が遠ざかっててもまだ聞こえた。

その音は幸希に何かを伝えようとしていたようにも聞こえた。

腕時計を見る。

九時四十五分。走らないと間に合わないと思い、足を大きく蹴り出した。

駅に着くと、腕時計は丁度十時を指していた。

鈴佳の言ったベンチを見ると、座って

いるのは年老いたお婆さん。明らかに鈴佳ではなかった。

「鈴佳の奴、遅刻か…」

そう思い、老婆の隣に腰掛ける。そのまま鈴佳を待つことにした。

夏の太陽が高く上がり、暑さが本日最高気温を記録した。時計は十

二時。鈴佳はまだ

見えなかった。

寝ているのかもしれない。そう思い鈴佳の家に電話する事にした。公衆電話に十円玉を入れダイヤルを押した。

『はい、高橋です。只今留守にしております。ピーという発信音の後…』

電話を切る。幸希は待つことにした。鈴佳を…

日が傾き始めた。
等々鈴佳が来ることはなかった。幸希は駅前のベンチを立ち、家への帰路に発った。
いつもの家への道。
虫の声が耳につき、暑さが体をだるくさせた。鈴佳は何故来なかったのだろう。何か理由があつて？ そう思うと不安で堪らなくなつた。

「鈴佳…」

幸希は走った。

行き先はもちろん鈴佳の家。とにかく早く鈴佳の元気な顔を見たかった。

鈴佳の家のドアを開ける。

「鈴佳！」

家には鈴佳の妹、千代がいた。

鈴佳にどこか似ていた。千代の目尻は何故か赤く、手には赤いハンカチを持っていた。

「千代、鈴佳は？」

肩で息をし、息を切らしていた。

「お姉ちゃんは…お姉ちゃんは………」

千代の目に涙が溜まる。

状況が把握できない幸希。鈴佳の身に何かあったのか。

「千代。泣いていちゃわからないだろ。鈴佳がどうしたんだ？」

ハンカチで目の涙を拭う。

それでも、目から涙が止まる事は無く、泣きながら。

「お姉ちゃんが、ヒック…家を出てすぐ、トラックに轢かれて…」

体中の血が冷めてゆくのがわかった。心臓が大きく唸る。

「鈴佳は…鈴佳は何処だ！」

幸希が千代の肩を激しく揺ると、千代はまた泣き出し、首を横に振った。

「お姉ちゃんは…死んじゃったよ……」

体の力がすべて抜けた。

膝は折れ、手は千代の肩から外れ地をついていた。目から流れる涙は頬を伝わることなく直接地を濡らしていた。

広い家の中で聞こえるのは2人の泣き声と、涙が地に落ちる音。そして、鈴佳を呼ぶ声だった。

『愛している』

伝えることの出来なかったこの言葉は、何処に行けばいい？俺の気持ちはどうする？

鈴佳は俺を待っていた。

苦しい、寂しく、悲しい暗い闇の中で、俺の声を待っていたのかもしれない。

『幸希』

彼女が俺の名前を呼ぶ事はない。

微笑むこともない。泣くことも、一緒に遊ぶこと

も。鈴佳が俺の前に現れる事は永遠に無い。そう、永遠に……

町には雨が降っていた。

真夏に降る雨は、
暑かった町を一気に冷たくした。
冷たくなった町は人影を無くし
寂しくなっていた。

俺は雨の中1人、墓の前に立っていた。

視線は鈴佳の眠る場所。未だにこの現実から
逃げようとしている自分がいた。

でも、この場所に来て墓を見ると心は一気に現実を
見る。辛かった。だけど、ここへ来なければ行けないような気がし
た。ここへ来て現

実を見なければならぬ。

そうしなければ、頭がどうにかなってしまいそうだった。

墓を背にしたとき、見覚えのある顔がそこにいた。

千代だ。千代と鈴佳は姉妹だけ

あって良く似ていた。声も顔も体型も何もかもが似ていた。

でも、それは似ているだけであって鈴佳と千代は全くの別人物。少
し、千代に鈴佳を

重ね合わせている自分が居た。

「幸希さん……」

やはり似ていた。でも、違った。

「…千代。…墓参りか？」

千代の右手には開いた傘、左手には花束を持っていた。

「はい…。幸希さんですか？」

「ああ」

雨は止み、日が出ていた。

「幸希さん、ズブ濡れですね。何時からいたのですか？」

「8時…」

「8時って…もう昼ですよ？」

そう言われて、幸希は腕時計を見る。確かに、正午を廻っていた。
「俺、そろそろ帰る」

そう言つて目に溜まつた涙を袖で拭う。

「泣いてたんですか？」

黙る幸希。何かを察したように千代は続ける。

「そうですね。幸希さんはお姉ちゃんの事、あの…その…好き…
だったんですから

「
…」

「あつ、その変な事言つてごめんなさい。これ、タオルです。風邪
ひきますよ」

そう言つてタオルを幸希に渡すと墓の前にしゃがむ。
花を取り替え、手を合わせる千
代。

墓を立ち去る事にした。

千代の肩は小さく震えていた。

第1章『悲しい過去』（後書き）

ご意見感想おまちしています。

第2章『笑顔で…』

帰り道、後ろに気配を感じた幸希はフツと振り返る。

そこには、同じクラスで親友の

城川賢治が居た。

「学校、何で休んだ？」

城川は背が高かった。

「鈴佳か？」

黙る幸希。

「…やつぱり。良いか、お前が鈴佳ちゃんのこと好きだったのはわかる。でも鈴佳ちゃんはまだ……」

「うるせえ！！てめえに何がわかる！！」

幸希が話に割って入る。そして、小さく

「ゴメン……」

と言い小走りにその場を去った。

城川が言おうとしていた事はわかる。

でも、そんな事聞きたくなかった。

出しきった涙が込み上げ、目の前が霞んだ。

「黒須…さん？」

声を掛けられた気がしたが目が霞んで見えない。でも、聞きなれた声。恋だ。

目の涙を袖で拭い、声がした方向を見る。

「やつぱり黒須さんだ。学校来ませんでしたね。風邪ですか？」

恋の名字は鈴川。恋は鈴佳の友達だ。

「いや、風邪じゃない。」

ふーんと、言いながら近づいてくる。良い匂いがした。

そして、幸希の所まで来て一言。

「じゃあ、今から遊びに行きましょう」

一瞬の沈黙。

「えっ？」

「駄目…ですか？」

俯き、大きな溜め息。かなりのショックだったらしい。恋は続ける。

「そうですね。黒須さんはいろいろ忙しいんですね…変なこと
言ってますいません
でした」

そう言つて、踵を返す。普通なら、ここで恋を止めて

「遊びに行こう」

とでも言うの

かもしれない。でも、そんな気分にはなれない。

そう思い俯いていると、下からヌツと恋の顔が出てきた。

「うわっ」

驚いて1、2歩後退した。

それを見て恋は笑った。

「黒須さん元気出して。私、落ち込んでいる黒須さんは好きじゃない」

そう言つて恋は背後に回り、幸希の脇をくすぐった。

「恋、止める。止めろつて。くすぐつてえよ」

「黒須さん。遊び、行きましょう」

幸希には断ることは出来なかった。

「おう」

「何処行きます?」

2人で歩く道、蝉の音がうるさい。

先程の雨で出来たのだろう。アスファルトの小さな水溜りを避けながら歩いた。

「えっ? 考えてないのか?」

「はい」

長い沈黙。

・
・
・

沈黙を破つたのは恋だった。

「…思い出巡り」

「はっ?」

恋の声が少し大きくなる。

「思い出巡り。鈴佳との思い出の地に行くんですよ。」

それが、終つたとき何か得られるかも知れないですよ。行きましょ

う!」

そう言つて、恋は幸希の腕を引つ張る。

「ちよつと待て。何処に行くんだよ」

「思い出の場所ですよ」

「だから、具体的に何処？」

恋の足が止まり、くるつと振り向き笑つて言つた。

「出会いの場所。私と黒須さん、城川君、そして鈴佳が初めて出会つた場所」

思い出した。

小高い丘の上、

小さな広場、

ベンチに腰掛けた女の子。

舞散る桜。

そうだ。あの日、あの場所で俺達は出会つた。

「わかつた。あの場所だな」

時計を見る。時計の針は午後二時。時間はたつぷりとある。

2人は丘へ向かつて歩いて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600a/>

思い出に代わるまで

2010年10月21日23時04分発行